

地震発生からの菊池市の対応状況

日時	対応状況
4/14 21:26	震度5強 災害警戒本部設置 (自動)
22:00	災害対策本部設置
4/15	熊本県全域に災害救助法の適用を決定
4/16 1:25	震度6強
1:30	市全域に「避難勧告」
4/18 13:30	一部避難勧告へ変更 (700世帯 2,000人)
4/20 18:30	被災建築物応急判定実施本部設置
4/25	激甚災害の「本激」として指定 (26日施行)
5/2 15:00	避難勧告解除
5/9 12:00	災害復興本部へ移行

熊本地震震度別回数

震度	菊池市	全体
震度4	16	88
震度5弱	1	7
震度5強	2	4
震度6弱	1	3
震度6強	1	2
震度7	0	2

地震の総発生回数 1,566回
(4月14日～5月25日午前9時現在)

菊池市の主な被害状況 (5月23日付 中間報告より)

項目	被害状況
人的被害	死亡 0人 行方不明 0人 重傷 11人 軽傷 15人
建物被害	住宅 全壊 38棟、大規模半壊 34棟、半壊 186棟、一部損壊 641棟 公共施設 調査中 その他 損壊 198棟
道路被害	国道 なし、県道 通行止め 3カ所、市道 通行止め 15カ所
河川被害	2カ所
橋梁被害	なし
土砂災害	なし
農作物被害	26万円 (スイカ 0.13ha)
畜産被害	畜産 3,223万円 (乳用牛3頭、肉用牛19頭、生乳176.7t) 施設 5億4,829万円 (牛舎25棟、豚舎2棟、鶏舎5棟)
農林業被害	1億9,146万円 (農地、農業用水路、菊池台地関連施設など 208件、林道19件)
商工業被害	8億5,037万円 (建物、設備、商品など 253件)

6弱

計測震度 5.7 発生時刻 1時25分10秒

地震列島・日本に 安全地帯はなかった



激震

2

「ドドドドドドド」
4月14日午後9時26分。轟音とともに地面から突き上げるような縦揺れに襲われた。続いて緊急事態を告げる携帯電話のアラーム音が鳴り響き、およそ20秒間、横揺れが続いた。
マグニチュード(M)6.5。市役所2階にある震度計は5強を示していた。その約40分後には震度5弱を観測。続けざまに大きな揺れに襲われ、部屋のいたるところから物が倒れる音や壁の軋む音が聞こえた。

「警戒」から「対策」へ 最大規模の体制で備える

市は地域防災計画に基づき直ちに災害警戒本部を設置。しかし、余震の数と規模の大きさが尋常ではなく、被害の発生と拡大が懸念されるため、午後10時、災害対策本部への移行を決定。

地震を14日から続く地震の「本震」とであると発表した。

「避難所の開設急いで」「被害状況の把握を」。対策本部の電話は鳴り止まず、怒声が飛び交う。土砂崩れや家屋倒壊、火災、けが人などの連絡が矢継ぎ早に舞い込み、県、消防団、警察、消防署など関係機関と連携して対応に当たった。

午前1時30分には市内全域に避難勧告を発令。4箇所だった避難所を27箇所を増やし、住民

職員を招集し、避難所の開設や被害状況の把握、保育園や小学校の休校を指示するなど、被害の拡大に備えた。
このとき、震度7を記録していた益城町や熊本市では建物が倒壊し死傷者が出るなどの被害が発生していた。本市でも一部地域で停電やがけ崩れがあったものの、人的被害の報告はなく、朝になると会社へ通勤する人々の姿が見られた。

まさかの本震 混乱する現場

最初の地震から28時間後の16日午前1時25分。再び大きな地震が熊本を襲った。M7.3。旭志地区では震度6強を記録し、前夜を上回る激しい揺れに見舞われた。最初の地震より規模が大きく、揺れた範囲も広がったことから、気象庁はこの

に安全な場所への避難を呼び掛けた。広範囲が停電し、信号機も停止。電話は通じにくくなり断水も発生した。沿道には毛布にくるまって避難する人々の姿が見え、通学路だった歩道にはブロック塀が倒れている。

市役所の駐車場や学校のグラウンドは避難してきた人の車でいっぱい。市役所のロビーも避難者であふれ、非常灯のほのかな明かりが不安をおびえる人々を照らしていた。



1. 避難所開設や被害情報の把握など初動対応に追われる災害対策本部 2. 通行止め情報などが次々に舞いこんだ 3. 避難者であふれる避難所 4. 学校のグラウンドも避難車両で埋まった

熊本地震リポート 復興の光



倒壊した納屋の前で地震発生当時を語る片岡さん。陶芸をしていたが、地震で作品も窯も全滅した。「災害相談や、被災証明の手続きもすぐに対応してもらい安心できた。今は落ち込んでいません。何年かかるかわからないが、もう一度ここで陶芸を始めたい」と力強く語った。

全国から届く支援 「対策」から「復興」へ

本震が発生した4月16日の夜には、5千人を超える人が避難所に押し寄せた。朝になるとボランティアが用意したおにぎりや、備蓄の非常食と支援で届いた水が配給され、たちまち行列ができた。家族で避難してきた男性は「避難勧告が出たのを知りみんなで避難した。不安で一睡もできなかった」とため息をつく。

断水地域では水道局と消防団が給水活動を開始。山鹿市や佐賀県伊万里市の支援を受け活動範囲を広げた。

停電や漏水の復旧後も地震の影響で水源地の水が濁り、長期間にわたり水道水を飲めない地域が出るという不測の事態が発生。飲料水の配給や自衛隊の支援により途切れなく給水できたが、今後の災害対策の大きな課題となった。

その後も全国から続々と支援物資が到着。24時間体制で対策に当たるため、国や県、市外自治体、ボランティア団体などが

人的支援を受けながら活動を続けた。電気や水道などのライフラインが復旧し、避難所の利用者も徐々に減少。気象状況や国土交通省の意見などを基に5月2日、全ての避難勧告を解除。被災地復興を加速させるため、9日には災害対策本部から災害復興本部へ移行した。

初動に一定の評価 情報整理に課題

「前震の発生後、市は大きな被害が発生することを予測し災害対策本部を設置した。結果として本震発生時に迅速な初動対応ができた」。市の危機管理専門委員を務める野村浩司さんはこう振り返る。

「速やかに避難勧告を発したことも適切な対応だった」と評価する一方、「情報の収集と整理に混乱が見られた」と指摘。「情報が来るのを待つのではなく集める必要。あふれる情報から必要なものを見定め、しっかり整理できるように日頃から訓練しなければならぬ」と訴えた。

4月14日— 対岸の火事ではなかった

災害発生時、まずは自らの行動で自分と家族の命を守らねばならない。地震発生の瞬間、被災現場では何が起こっていたのか。被災者の声を伝える。

まさかの震災。それでも……

「家族が無事で本当に良かった」。片岡耕太郎さん（高野瀬）は倒壊した納屋を見ながら静かに語り始めた。

家族6人で住んでいた借家が4月16日の本震で被災した。前震でも大きく揺れたが、物が落ちた程度で目立った被害はなし。落ち着きを取り戻すと、テレビから流れる光景に目を疑った。「益城町の被害を見て愕然としました。まさか熊本でこんな被害が出るなんて。でも、そのときはまだ対岸の火事だと思っていました」

16日の深夜は家で休んでいた。前震より大きな揺れを感じ、すぐに命の危険を感じた。「逃げる！」。寝ている家族を起こすために大声で叫び、立ち上がった瞬間、停電で部屋が真っ暗になった。近くに寝ていた5歳の娘を脇に抱え家の外へ向かった。靴を探したが真っ暗で何も見えない。なんとか懐中電灯を探しだし外に出ようとしたとき「ぎゃー！」という長女の悲鳴が耳を突き刺した。

長女のそばへ駆け寄ると、そこにはあるはずのない納屋の屋根が目の前まで迫っていた。「間一髪でした。大事な仕事場を失いましたが、命があっただけでも良かったです」

備えの大切さを痛感

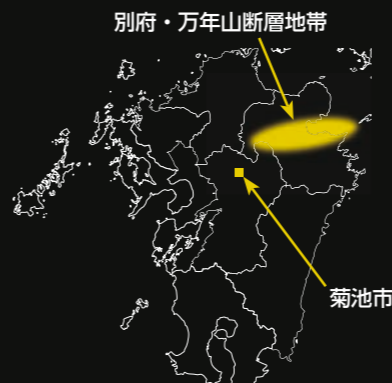
災害ボランティアの経験もあるなど防災意識もあった。「火事ときの避難方法は家族で話し合っていたが、地震は考えなかった」と打ち明ける。

「今回特に失敗したと思ったのは、履物を枕元に置いておかなかったこと、携帯電話の充電をしていなかったこと、車の燃料を満タンにしておかなかったことです。実は前震の後、震災を経験した友人からアドバイスをもらっていたんです。今思えば、ひとごとのように考えていたのかもしれない」

恐ろしい思いをしたが「たくさんさんの支援と温かい言葉に救われた」と片岡さん。「支えてくれる人が周りにたくさんいることに気付けた。この経験をプラスにして前を向きたい」

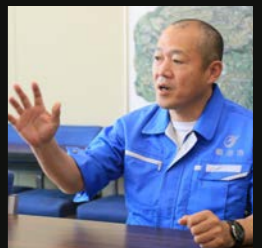


1_本庁3階に設置された災害対策本部 2_全国から支援物資が続々届いた 3_国土交通省 TEC-FORCE による危険箇所調査 4_避難誘導やパトロール、給水支援などで消防団が活躍 5_佐賀県伊万里市の給水車 6_自衛隊は4月17日に菊池市に入りさまざまな場面で活躍した 7_川口病院を拠点に活動する災害派遣医療チーム(DMAT)



菊池市は現在、別府・万年山断層層による地震（6弱）を想定し、平成26年から5カ年計画で防災訓練を実施している。

今回の地震では、関係機関との連絡体制づくりや避難所開設などの初動対応に訓練の成果が見られた。しかし、給油、ガス、食料、水、電気、電話、下水道など、災害時に必要なライフラインを確保するための協定が不十分だったため、初期の応急対応に支障をきたした。早急に自治体や民間企業との協力体制を強化することが求められる。市民には災害への備え（自助）、避難活動や被災者支援への積極的な参加（共助）をお願いしたい。今回の経験を忘れず、さらに一丸となって災害に強いまちを目指してほしい。



危機管理専門委員 野村浩司さん



9 5



10 7



6



8



●4月14日

被害甚大

Photo report

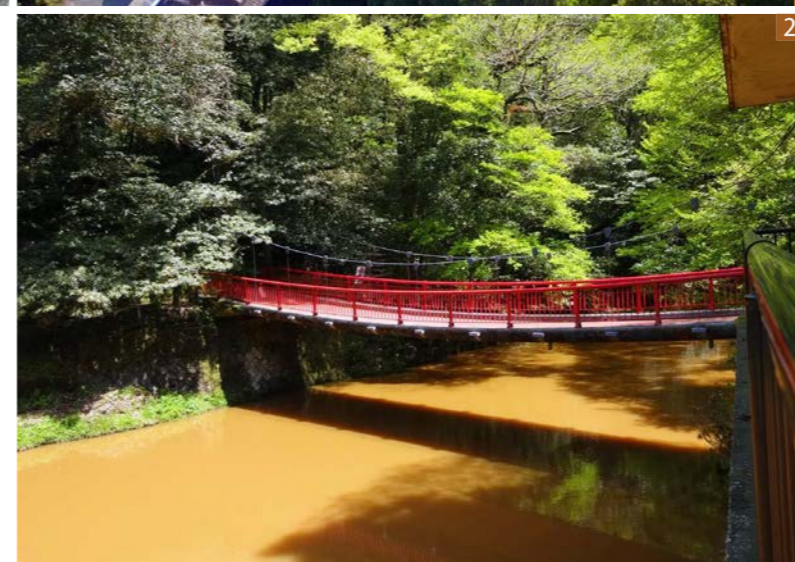
住宅、文化財のほか、農林畜産業や観光業といった市の基幹産業にも影を落とす熊本地震。被害を写真で振り返る。

1



11

- 1 被害が大きかった茂藤里区。ブルーシートや倒壊した建物が見える
- 2 菊池渓谷も大きな被害を受け現在は入谷禁止。深夜の地震だったため観光客への被害は免れた
- 3 神社など耐震性の低い建物は特に被害が多かった
- 4 中山間地で多数の土砂崩れが発生
- 5 つぶれた牛舎。農林畜産施設に甚大な被害を受けた
- 6 市内各地で地割れが発生
- 7 1階部分がつぶれた家屋
- 8 10 12 土砂崩れや落石により各地で道路が通行止めに
- 9 旭志グラウンドでは地盤沈下が発生
- 11 登録有形文化財の菊の城本舗では煙突根元のブロックが一部崩れた



2 3



12



4



青木 満さん
(北住吉)

避難者の栄養バランスを考えて2種類の料理を提供しました。避難所では被災者への声かけもして、どんなものを食べたいかリクエストも聞いています。ある日、レトルト食品の作り方を間違っている避難所があったので教えてあげました。こうしたサポートもしていきたいです。

近くの避難所に炊飯器がなかったのでお店にあったのを2台貸し出しました。隣近所で助け合うように、避難所でも助け合いが大事だと思います。心に少しでも余裕があれば、トイレを掃除したり運営の手助けをしたり。できることをやろうという意識が大切だと感じました。



高橋三恵さん
(片角)

地震の影響で多くの飲食店が休業していました。そんななか、飲食店を営む友人が炊き出しボランティアを始めたんです。その姿を見て私もできることがあるんじゃないかと思いました。子どもたちも進んで手伝ってくれました。支え合うことの大切さを学んでくれたと思います。



荒木百合子さん家族
(東正観寺)

1_ こぼさないようにおでんを運ぶ子ども 2_ 炊き出しする高橋さん。近くに住む若者たちも手伝った 3_ ヘルスマイトの料理は栄養バランスに気遣ってある 4_ 荒木さんの友人が炊き出しをサポート 5_ 抜群のチームワークを見せるヘルスマイト

心も体も温まるおでん

「うちで作ったおでんです。温かいうちにどうぞ」。避難所で手作りのおでんを振る舞う荒木百合子さん。自らも避難者でありながら「皆さんの助けになれば」と炊き出しを始めた。

築50年の家を離れ、家族で避難所に身を寄せた。配膳は子どもたちが担当。最初から進んで手伝ってくれたという。おでんを食べた避難者は「おにぎりしかなかったけん汁物はありがたか。それに夜はかなり冷えるけ

支援者になる意識を

東北の被災地復興支援活動を行い、被災者支援に詳しいNPO法人遠野まごころネットの木寅健吾さんは、共助の大切さを次のように語る。

「何かあったら助け合おう」という人が多い地域は災害に強い。『いつか被災者になるかも』という意識だけでなく『支援者になる』という意識を持つことも大事。今回のような大規模災害では行政も手が回らなくなり、避難所生活が長引けば皆さんの弊害が出てきます。公助だけに頼らず、お互いに助け合うことが復興への近道です」



動き出す助け合いの精神

防災の基本は「自助」。しかし、一人でできることには限界がある。地震発生直後から、市内各地で市民の支援活動が始まった。そこにはさまざまな支援のかたちと、助け合う人々の姿があった。

笑顔と料理で安心を届ける

食生活改善推進員（ヘルスマイト）の会員は、4月16日から避難所への炊き出しを始めた。毎日20人以上の会員がボランティアで調理に参加し、各地の避難所へ届けた。

毎日数百食の依頼があり、多いときで約1200食分の炊き出しを作った。調理場は毎日てんやわんやだが、不思議と笑い声が絶えない。会長の青木満さんは「大変なときだからこそ、料理は楽しく作らないとだめなんです。イライラして作った料理はおいしくありませんからね」と思いを語る。「避難所の皆さんにおいしい料理で安心を

届けたい。だから私たちはいつも笑顔を絶やさないですよ」

抜群のチームワークで手際よく調理する会員たち。「おにぎりを握り過ぎて肩も腕もぼんぼん。もう一生分握ったみたい」と笑う。それでも「困ったら人がいっぱいおらすけん」と手を休めようとはしない。なかには家が被災した会員もいるが「大変なのはみんな一緒。だからお互いが支え合っていかんとね」ときっぱり。

避難所では料理を配りながら声かけもしている。肉じゃがを食べた避難所の女性は「おいしい料理と笑顔でいつも元気をもらっています。感謝しかありません」と涙ぐんだ。

地域住民で助け合い

4月16日の朝、隈府御所通の一角で炊き出しがあり、近所の人が集まった。始めたのは近くで飲食店を営む高橋三恵さん。お店の材料を使っておにぎりやだご汁などを振る舞った。

高橋さんが炊き出しを始めるのと、近所の人が手伝ってくれた。「うちのも使って」と食材を持って来たりしてくれた。「自然に助け合いの輪が広がっていききました。地域住民のつながりの強さを感じました」

初めての大地震でパニックになったが、市から送られてきたメールを見て冷静になれたという。「最初はみんな慌てて外に

出てきました。その後、市から届いた安心メールの内容を見て、みんなでガスの元栓、ブレーカー、戸締りを確認するなど、落ち着きを取り戻しました」

防災情報を知らない人には進んで教えた。「水質基準を満たしていない水道水を飲もうとする人がいたので、『見た目が透明でも飲んでダメ』と伝えました。高齢者などは情報が入らず不安を抱えている人も多くので、正しい情報を伝えることも大切な助け合いだと思います」

「私が炊き出ししていることを知った友達や同僚が、具材を用意してくれたり手伝ってくれたりしました。ささやかな支援ですが、支えてくれる人たちの分も思いを込めて、できることを続けていきたいです」



1.2.3_がれきを分別しながら撤去作業。連休中は高校生や大学生の姿も多かった 4_炊き出しの準備 5_高齢者宅を訪ねる菊池南中野球部員 6_ボランティアセンターには掲示板があり参加者同士でメッセージを貼り付けた 7_大きな家財道具も協力して搬出 8_写真を撮ってSNSにアップしない、被災者の要望に応えるなど、職員がボランティアの心得を伝授



菊池市社会福祉協議会（市社協）は4月18日、被災者支援のためにボランティアセンターを開設した。本市での開設は4年前の九州北部豪雨に続き2回目となる。

19日から登録受け付けを開始し、3日間で約300人が登録、50件の支援依頼が集まった。「開設のタイミングは難しかった」と市社協福祉課の青木輝彦課長は打ち明ける。「水害は水が引けばいいし、台風は過ぎてしまえば大丈夫だが、地震は余震があり予測できない。急いでニーズに応えたいが、ボランティア参加者の安全を確保するためにも、準備と段取り、見極めが重要」と説明する。

事前登録制で、登録者には後日、出勤依頼の連絡が届く。申し込んでもすぐに現場に入らず

ボランティアセンター開設

れている。子どもたちから水を受け取った立嶋政宏さん（北宮）は「一人で給水に行くのは大変だったのでありがたい」と喜んでいた。



災害ボランティア

災害ボランティアは、大規模災害の被災地支援活動に欠かせない存在となっている。本市は県内でいち早くボランティアセンターを立ち上げ、多くの人が利用した。被災地でどんな活動が行われたのか。ボランティアの現場を追った。

「困っている人たちのために何かしたいと監督に相談しました」と主将の佐藤汰侑さんは語る。水道水が使えず給水に行くのが大変だという人がいることを聞き、ボランティアで水を配ることに決めた。

配ったのは500リットルのペットボトル24本入りのダンボール45箱。配達には地元の区長と民生委員も協力し、子どもたちを案内して回った。

「水が使えない間ずっと地域で助け合ってきたが、それでも追いつかないほど給水が大変な家庭もあった」と北宮区長の石淵博人さんは打ち明ける。個人だけでなく、地域にとっても災害ボランティアの支援が求めら

もどかしさを感じるボランティアもいるが、青木課長は「待ってもらってもボランティアの一つ」と理解を求めた。

現地での活動は4月22日から始まった。まずはセンターで説明会があり、職員がボランティアの心得や注意事項などを説明。続いてグループ分けと現場への振り分けが行われた。作業用資材が貸し出された後、職員が現場へ案内した。

がれきの撤去と家財の搬出依頼があった現場では、高校生から60歳代の男女6人のグループが入り、黙々と作業をこなしていた。「こんなにたくさん来てくれるとは思わなかった」と作業を依頼した男性は頭を下げる。「家族だけではとても処理できない量でした。安心して次の生活を始められます」

用意した軽トラックで家財を搬出した渡邊賢一さんは「予想以上に地震の被害が大きくて驚いています。高齢で一人暮らしの人は作業も大変。私たちが顔を見せるだけでも安心してもらえます。時間が許す限り活動を続けたい」と汗を拭いた。

「こんにちは！ きれいな水を持ってきました」

子どもたちのほつらつとした声が響く。

4月29日、菊池南中学校野球部の部員27人が、水道水が濁っている地域の高齢者宅などに飲料水を配達した。

「きれいな水を飲んで元気になるってほしい」

ボランティア参加者の声



佐藤汰侑さん
(菊池南中3年)

家が被災して大変だったけれど、同じように大変な人の助けになりたいと思いました。きれいな水を飲んで元気になってもらえたらうれしいです。



渡邊賢一さん
(雪野)

同じ市内でも地域によって被害の大きさが全く違いました。困ったときはお互いさまの気持ちで、被災者の手助けしていきたいです。



川口裕起さん
(球磨工業高校3年)

連休は遊びに行く予定でしたが、被災者の助けになりたいという思いの方が強かった。ボランティアの経験は自分のためにもなると思いました。



岩下よ子さん
祐子さん
(泗水平野)

以前からボランティア活動に関心がありました。仕事にも余裕ができ、家でじっとしているよりも何かできることをやろうと親子で参加しました。

4月20日

被災者に寄り添い心と体をケア

長引く避難生活や余震への恐怖などで、被災者は強いストレスにさらされ続けている。心身の深刻な不調につながらないように、被災者の声に耳を傾け、不安をときほぐす心のケアが必要だ。

声かけとマッサージで被災者をケア

「どこか痛いところはありますか」

避難者の足をマッサージしながら、整体師の北里嘉幸さん（長野）は優しく語りかける。

地震のショックや長引く避難所生活で、体が固くなったり腰を痛めたりする人がいる。こうした人々を助けようと、避難所の巡回マッサージを始めた。施術は一人20分程度。何気ない会話を交わしながらゆっくりと

もみほぐしていく。施術を受けた70代の女性は「避難所生活ではほとんど体を動かさず、すっかり固くなってしまいました。マッサージで体がほぐれたら、暗い気持ちも明るくなりました」

た」と微笑む。

県内ではエコノミークラス症候群で死亡するケースも発生しない高齢者が多い。もっと啓発することが大事」と、適度な運動と水分補給も呼び掛けている。「地震発生後ずっと眠れなかった人が、マッサージを受けたら久しぶりにぐっすり眠れたと喜んでくれました。被災者の皆さんが一日でも早く日常に戻れるよう、一人でも多くの人をケアしていきたい」

安全と安心で子どもたちに日常を

5月13日、菊池北小学校で地震を想定した避難訓練が行われた。「地震が発生しました。避

難してください」

地震発生の場合が出ると、児童たちはすかさず机の下に隠れた。数秒後に避難の号令がかかると、速やかに担任の先生の前に整列。前方から順に校庭へと駆け出した。

「みんな真剣に訓練に取り組んでいました。避難までの時間も前回の訓練を上回ったようです」と桐陽介校長は語る。

「熊本地震は夜間に発生したが、次は日中に起こるかもしれない。まだ余震が続いていることもあり、避難方法を確認して子どもたちが自分で自分の命を守るように実施しました」

地震の影響で休校していた市内の小中学校は、4月26日に一

斉開校。11日ぶりに子どもたちの姿が学校に戻った。ただ、地震で家が被災したり怖い思いをしたりして、心に傷を持ったまま登校する子どもも多い。学校ではそんな子どもたちを気遣いながら、少しずつ日常を取り戻そうとしている。

「本校にも被災した児童が多くいます。一見大丈夫そうに見えるけど心にストレスを抱えている場合があります。学校は子どもたちが安全・安心に楽しく過ごせる場所でなければなりません。周りの大人が余裕を持って安心感を与え続けられれば、子どもは立ち直っていきます。そのために学校・家庭・地域で見守っていくことが大事です」

1_声かけしながらマッサージ 2_教科書やノートで頭を守りながら校庭に避難する菊池北小の児童たち 3_机の下に隠れて落下物に備える 4_菊池郡市鍼灸マッサージ師会もボランティアで被災者をケア 5_被災者の声を親身になって聴くDPAT 6_栃木県から派遣された保健師チーム。被災地を一軒ずつ回りながら心身のケアを行った



【用語説明】

▼DPAT

大規模災害時、被災者の心の問題に対処するためにつくられた災害派遣精神医療チーム。精神科医や看護師などの数人のチームが、被災地の精神保健医療を支援する。

▼エコノミークラス症候群

飛行機や車の中などで長時間同じ姿勢でいると、足の血液の流れが悪くなり血の塊ができる。その塊が血管を通じて肺の動脈まで運ばれると、血管が詰まって死亡する場合もある。

面倒がらず、あせらず、寄り添い続けること

震災直後から子どもたちにはいろいろな反応が出てきます。今まではなんともなかったのに、突然、トイレやお風呂に一人で行けなくなった。地震警報のまねや地震ごっこを始めた。家の中だと眠れず、外でしか眠れなくなるケースもあります。

こうした子どもの変化を見て保護者は不安になるかもしれませんが、生き物として自然な反応です。大切なのは子どもの要求をしっかり受け止め、安心感を与えること。やめさせたり拒絶したりしてはいけません。

面倒がらず、あせらず、温かく寄り添い続けることで、子どもは自分の力で立ち直っていきます。

それでも、中には引きこもるようになったりキレやすい性格になったりして日常生活に支障が出てくる子どももいます。このような場合は、心的外傷後ストレス障害（PT



DPAT 源田圭子 医師
東京都福祉保険局都立精神保健福祉センター地域援助医長

周りの人も、支援が必要と思われる子どもや保護者に寄り添うことが大事です。子どもや保護者の話に耳を傾け、お互いに見守り助け合うことが、地域に日常を取り戻すことにつながっていきます。

子どもたちの思い



越猪日香理さん 神山史歩さん
(菊池北小6年)

みんなで励まし合って

また地震が来るかもしれないといつも不安で、しばらくは夜もあまり眠れませんでした。消しゴムを使うときに机が揺れるだけでもドキッとします。低学年の子が登校中に「手をつないで」と言ってくることもありましたが、そのときは「大丈夫だよ」と優しく手を握っています。

大きな地震の後、家族で防災について真剣に話し合いました。家族同士近くで寝たり、履物を枕元に置いたりしています。

学校が始まってうれしいです。友達といると楽しいし、地震のことをお互いに話すことでスッキリすることもあります。地震に負けないようにみんなで励まし合って明るく過ごしたいです。

地域のために、地域で動く

地震発生から約1カ月。震災の現実を受け止めつつ、地域の将来を考えながら前に進もうと動き出した人たちがいる。



1_震災ダイアログは市内で初の試み 2_講師の徳永さんがさまざまな手法で参加者の思いを引き出した 3_これからできることのアイディアを出し合う参加者 4_農業ボランティアに精を出す菊池農業高校生 5_地域の支援活動は住民のやりがいづくりにもなっている

対話から始める一歩

「あなたは職場で地震に遭いました。家族に電話してもつながらない。部下の安否も確認する必要がある。仕事を優先しですか」。講師からの質問に、参加者は互いにYES・NOカードで回答を見せ合う。

震災の経験、不安な日々、必要な支援、これからの地域づくりなどを語り合う集会「震災ダイアログ」が5月21日、限府の旧松倉邸で開催され、市内外から約30人が参加した。

集会では質問形式による意見交換のほか、震災の経験や不安、これから自分にできることなどを対話する。「積極的な呼びかけはしませんでした、参加者が多くて驚きました。講師が止めても話がやまず、不安を吐き出し思いを伝えたい人がたくさんいることを実感できました」と、主催したまちづくり団体「菊池養生詩塾」の佐藤忠文さん(富

の原西)は話す。講師を務めた有明広域消防本部の徳永伸介さんは「災害ボランティアなど、すぐに動けた人もいればそうでない人もいます。動けなかった人ほどややもやが溜まっており、それを解消し次につなげることが大切」と講話。参加者は「不安を話してすごく楽になった」「いろんな考えを聞いて光が見えた。自分にできそうな支援活動に挑戦したい」と明るい表情を見せた。

支援活動を後方支援

本市を含む県内被災地の復興支援を目的に5月12日、市民有

の原西)は話す。

講師を務めた有明広域消防本部の徳永伸介さんは「災害ボランティアなど、すぐに動けた人もいればそうでない人もいます。動けなかった人ほどややもやが溜まっており、それを解消し次につなげることが大切」と講話。参加者は「不安を話してすごく楽になった」「いろんな考えを聞いて光が見えた。自分にできそうな支援活動に挑戦したい」と明るい表情を見せた。

「これからは被災していない地域住民による支援を考えることも大事」と佐藤さん。「被害が大きい地域には息の長い支援が必要です。住民同士の対話を通じ、地域でできる長期的支援について考える機会をつくっていきたい」



志による地域支援団体「きくちのもの」が立ち上がった。 「支援をしたい人、手伝ってほしい人など、いろんな人の思いをつないで熊本の活力にした」と代表の古田恵莉さん(西郷)は設立の思いを語る。 市外での復興支援、農業ボランティア、災害ボランティアスタッフへの炊き出しなど、活動内容は多岐にわたる。先日は50代から80代の市民7人から「県外の派遣団に手料理を振る舞いたい」との要望を受け、滞在中の派遣団とつなぎ炊き出しの機会を設けた。「派遣団の皆さんは地元の手料理を食べてとても感激されました。話も弾み交流を楽しんだようです」と活動の手応えを感じている。 地元高校生と一緒に復興支援イベントを手伝ったり、被災した農家の農作業を手伝ったりと、世代間もつなぎ活動の幅を広げている。「参加者は活動を通じて意気投合し『次は何ばしようか』と盛り上がりつつあります。支援する側もされる側も元気になる、そんな復興支援を続けていきたいです」

地域で支援者をサポート

現在、多くの災害派遣団が本市に滞在し、そのほとんどが民間の宿泊施設や公共施設を利用している。しかし、部屋に空きがなく、やむを得ず被災地から離れた地域から数時間かけて被災地入りしている団体もいる。この問題を解決するため、野間口区では地区の集会所で派遣団を受け入れた。

集会所を利用したのは茨城県の保健師チーム。大津町の復興支援のため、熊本県へ被災地入り打診していた。「知り合いを通じて菊池に受け入れ先がないか相談を受けました。民間の宿泊施設に空きがなかったため区と役所に相談し、集会所を提供しました」と、大石和幸さん(野間口)は説明する。

チームは5月13日まで集会所を入れ替わりで活用。その間、地域住民が朝食などを差し入れた。「個人では無理でも、地域ならできる支援があります。熊本のために来てくれる人たちを地域でサポートする活動がもっと広がればいいですね」



きくちのものでは、復興支援したい人、されたい人を募集中。詳しくは下記までお問い合わせください。 関きくちのもの事務局 ☎080-4272-8560 E-mail: kikuchinomono@gmail.com

動ける地域が動き、被災地に手を差し伸べる

菊池市は、特に被害が大きい阿蘇地方や益城町などの状況を把握しながら活動できる拠点都市として、全国の災害ボランティアから注目を集めています。

東日本大震災では、岩手県遠野市が被災地でありながら後方支援の拠点として機能しました。現在も多くの災害ボランティアが遠野市を訪れ、被災地へと向かい活動しています。動ける地域が動き、困っている地域に手を差し伸べることは、被災地の早期復興にとっても重要です。

「熊本を助けて」という人が全国にたくさんいます。しかし「どこに行ってもどうやって活動すればいいかわからない」という人も多くいます。こうした人たちが「菊池に行け

ば活動をサポートしてもらえ」となるような、受け皿としての役割にも期待しています。

災害ボランティアで来る人たちの中には、支援活動だけでなく、温泉に入ったり観光したり、菊池の魅力を満喫したいという人もたくさんいるでしょう。そうした経験は、訪れたまちへの愛着を深めることにつながります。リピーターになる人も多く、なかには移住する人もいます。実を言うと、私も東日本大震災のボランティア活動がきっかけで遠野市に根付いた一人です。

今後、災害ボランティアをするために菊池市を訪れる人が増えてくるかもしれません。市民の皆さんにはぜひ、こうした人々を温かく見守っていただきたいと思います。



遠野まごころネット副理事長 本部事業統括マネージャー 小谷雄介さん

▼遠野まごころネット 東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者を支援するために、遠野市民を中心として結成された被災地支援団体。5月17日に本市にベースキャンプを開設し、熊本地震の被災地復興支援活動を行っている。



1.2 会場に設置された募金箱。集まったお金は義援金として県に渡された 3 菊池高校生が「きくちのもの」の一員として保育ボランティアに参加 4 県外からアーティストも復興支援に駆けつけた 5.7 さまざまな雑貨やグルメが並び大人も子どもも楽しんだ 6 主催した雑貨 bb の佐藤由紀さん



にぎわいづくりで復興支援

「きくちみんなでマルシェ〜つどいあい ささえあい わらいあい〜」は5月22日、菊池市民広場で開催され、大勢の来場者でにぎわった。震災でイベントの自粛ムードが漂うなか、急遽開催を決定したマルシェ。開催に携わった人々の思いに触れる。

▼トリプルボランティア
がれき撤去などの「作業」だけでなく、被災地を「観光」したり、見聞きしたことをインターネットや口コミで「伝達」したりするのも復興の支えになるという考え方。

久しぶりの笑顔

毎年、市内では初夏にかけてさまざまなイベントが開催されるが、ことは地震の影響で軒並み中止になった。4月に開催予定だった「きくちマルシェ」もその一つ。出店予定だったお店の多くが被災し、やむなく中止となった。

きくちマルシェは3年前に始まった市民主催のイベント。毎回市内外から大勢の人が訪れる菊池の春の風物詩になっている。それだけに、中止を残念がる声が多く聞こえた。「震災でみんな元気をなくしていました。お店やお客さん同士、顔を合わせたらまた元気になれるはずと考え開催を決意しました」。主催者の佐藤由紀さん（下長田）は思いを語る。

準備期間は10日間。厳しいスケジュールだったのが、菊池観光温泉旅館組合やきくち観光物産館など関係機関の協力を受けて実現した。

当初は出店数を40店舗と予定していたが、最終的には70店舗が集結。「声をかけたお店の人が『あの店も被害を受けたから出してあげて』と、どんどん増えていきました。急な開催だから売り上げ少ないかもと説明しても『菊池を盛り上げたいから』と県外から来てくれる人もいました」
熊本市から出店した糸石邦和さんは

「地震以来、お店の客足は減っていた。呼んでもらえるだけでもうれしい」と感謝を述べる。自宅が被災した友達を誘って遊びに来た女性は「こんなに笑顔になれたのは本当に久しぶり。買い物を楽しんで被災者の支援もできる。こんなイベントは自粛せずにどんどんやってほしい」と訴えた。

トリプルボランティアに期待

マルシェには県外から訪れている災害ボランティアの姿もあった。「普段来ない人に菊池をアピールできる良い機会」と、きくち観光物産館の中嶋広宣支配人は期待を寄せる。「買い物や外食を自粛していた災害ボランティアの皆さんも、最近は観光したり買い物に来たりするようになりました。こうした人たちにリーダーになってもらうには、積極的ににぎわいをつくり出し、楽しさを体感してもらおうが一番。ボランティア同士でも口コミで菊池の魅力を広げてもらうことにもつながります」

終了後、出店者が次々に佐藤さんの下を訪れ、重たくなった募金箱を手渡していった。「大変でしたがやって良かったです。もっと地域を元気にしたい。きくちマルシェは、ことしの秋、さらにパワーアップして復活しますよ」



現在 未来

私たちが一人一人が 被災地を照らす光



熊本の友達を励ましたい

福岡県の大刀洗町立菊池小学校から菊池北小学校へ応援メッセージが届いた。両校は以前から交流を続けており「熊本の友達を励ましたい」と菊池小の子どもたちが思いを込めた。

届いたメッセージは縦80センチ、横110センチの大判用紙6枚。ハート型に切り抜いた色紙が貼り付けてあり、「心強くなればって」「じしんに負けるな」など、菊池小の全校児童338人全員の思いが手書きしてある。

メッセージを読んだ北小6年の村上正道くんは「最初に見たときはびっくり。ありがたい言葉がたくさんもらって励みになりました。菊池小のみんなの思いを胸に頑張っていきます」と話した。

一人一人が復興の光

地震発生直後から、取材をとおしてたくさんの人に出会ってきた。物資を送る人・運ぶ人。情報を発信する人、被災者の心身をケアする人。がれきを撤去

する高齢者、水を配る子ども。炊き出しする女性、寄付する有名人。歌を歌う女性、着ぐるみで踊る男性。励まし合う子どもたち、それを見守る大人たち――。支援のやり方も世代も性別も立場が全然違っても、「地震で困っている人を助けた」という思いはみんな同じ。被災者に寄り添う一人一人の思いや行動は、被災地を明るく照らす希望の光のように、きらきらと輝いて見える。

熊本地震は私たちから多くの大切なものを奪い去った。一方で、私たちはたくさんの人に支えられて生きていることにあるため気が付かされた。

支え合い、助け合いながら苦難を乗り越えたとき、人の絆は前よりもっと強くなる。強い絆で結ばれた人々がいる被災地は、ちよつとやさつとじゃへこたれない、災害に強い地域へと生まれ変わるだろう。

「負けない菊池」
「負けない熊本」
輝きだした復興の光が消えることのないよう、私たちにできることを続けていきたい。